

海外転校の勧め

その2

2002年3月5日

経済学部教授 高島 均

以前、『海外転校の勧め』という文書において、日本の大学における成績さえ良ければ、金銭的負担を心配せずにアメリカの大学に転校できる、ということを書きました。でも、多くの皆さんは、『成績さえ良ければ』という条件に、尻込みしてしまうかもしれません。『応募者の成績が、フル・スカラーシップ（生活費給付付きの奨学金）の付与に相応しいか相応しくないか』を決めるのは、応募者ではなく、皆さんが応募した大学です。自分の評価と他人の評価は、必ずしも一致しませんから、応募してみなければ分かりません。しかし、ここでは、『成績さえ良ければ』という条件に合致しなかった場合について、助言します。

アメリカでは、授業料を親に頼って大学に通っている学生は、極めて少数の特殊なグループに属する人たちです。それでは、フル・スカラーシップをもらえなかった学生は、どのようにしているかということ、多くの学生は、学生ローンを利用しています。学生ローンということ、皆さんは、日本の銀行の教育ローンを思い浮かべると思いますが、アメリカにおける学生ローンは、日本の制度に照らすと、日本育英会の奨学金（貸付）を念頭におくのが、一番実体に近いものです。学生ローンは、連邦政府の規定によって、全ての大学に提供が義務付けられているもので、連邦政府が直接提供するものと、商業銀行が連邦政府の規定に従って提供するものとがあります。両者は、その内容が若干異なっているようですが、いずれも、返済は、卒業し就職してからです。ローンの枠は、連邦政府が直接提供するローンの場合は、学部学生に対しては最大4000ドル、大学院生に対しては最大6000ドルのようです。

ところで、不足する資金（生活費＋授業料）はどうしたら良いでしょうか。学費は、州立大学・市立大学のように安い大学で年間12,000ドル、ボストン大学やブラウン大学程度のレベルの私立大学ですと年間3万ドルです。スタンフォード大学やエール大学などですと、住居費も入れると8万ドルになります。従って、有名大学に自分ひとりの力で通うのは、極めて困難でしょう。しかし、州立大学をはじめ、年間12,000ドルで通える大学ならば、アルバイトをすれば、やっていけ

ます。多くの学生は、夏休みにアルバイト（ベビーシッターなど様々）に精を出して学費を自分で稼いでいます。また、多くの大学は、昼夜開講になっていますから、日中は働いて、夜に大学に通っている学生も多くいます。

どの大学においても、様々な団体が、額も対象者も様々な奨学金を、給付あるいは貸与しています。少額（500ドルほど）ですが、応募者のほとんどがもらえる（給付）ようなものもあります。学生ローンと様々な奨学金を利用し、足りないところは、アルバイトで補い、海外の大学への転校を通じて、君達がその人生を飛躍させることが出来たならば、教師としてこんなに嬉しいことはありません。

私は、学部・大学院の全ての期間にわたって、親から一銭の援助も受けずに生活しました。親が貧しくて、私の授業料を負担できなかったのではありません。親が、拒否したのです。私の同級生のほとんどは、もちろん、親に頼って生活していました。自分だけが、理不尽な親を持って苦労している、というように思っていました。私の親は、別に、「大学生になったから自分ひとりで生きていくべきだ」という考えを持っていたわけではありません。「子供である以上、一から十まで親の言う通りになるべきであり、親の言う事に反抗する子供は、一切面倒を見ない」というだけのことでした。そんな親に対する感情には、複雑なものがありました。それは兎も角、自分ひとりの力で学生生活を送ってきたことを、私は、誇りに思っています。そして、20歳を過ぎたら、人間は、少なくとも、自分の力で生きていく努力をすべきだと考えています。従って、今日の日本の多くの学生が、大学に入学した後も、生活費はもちろん授業料に至るまで親に出してもらって当然のように生活していること、さらに、親自身が大学生となった子供の生活費と授業料を負担するのを当然と思っていることに、極めて奇異な感じを持っています。大学生になっても、親に頼って生活しているのは、日本人の他は、韓国人・台湾人・そして万元戸の中国人の子供ぐらいではないでしょうか。

それは兎も角、君達を応援してくれている優しい（過ぎる）お父さんやお母さんなどは、少なくとも、明治学院大学に君達を通わせるために負担しているのと同じ程度の金銭的負担は、喜んでしてくれるでしょうから、後は、英語の努力のほかは、君達が海外に雄飛するのに必要なのは、君達の勇気と工夫だけだと思います。